

いました。そして、それを機に埼玉県秩父市下影森のキャノン電子本社に就職致しました。カメラ部品の製造に工員として、五十五歳の停年まで働き、製造部主任が最後の職責でした。

私は学歴がないのですが、学校出の方は二、三年で主任となります。私の息子は早くから甲府の水晶店に勤め、今東京銀座の松屋百貨店の貴金属店の責任者として働いております。

昭和五十年九月十五日に甲府の息子の家に移り住み現在に至っております。

内地勤務の教育係として

福岡県 森 泉

(旧姓 木下)

私は大正十一（一九二二）年九月二十五日、福岡県山門郡山川村にて父木下仁三郎、母ハツの三男坊として蜜柑農家に生れました。

この地は天地澄明、寒村ながら気候、風土、絶佳の中で、男三人、女三人の六人兄弟で、皆健康に育ち、両親の傍らで家事を手伝いをしつつ成長しました。母校、山川南部尋常高等小学校高等科を卒業、続いて青年学校へ進み、心身の鍛練と研学修業に励みました。

そのころのラジオニュースや新聞の報道には、若者の血を沸かせるような出来事が次々に発生する時代であったと思います。中国では蔣政権に対し、王兆銘、周仏海、王克敏の政府の事や、ドイツからはヒットラー・ユーゲントの日本訪問があ

り、ラジオからはその歓迎の歌曲が流されています。
した。

燦たり輝き 空晴れるよ

ようこそ はるばる

我等が戦士

万歳 ヒットラーユーゲント

万歳 ナチス

確かこのような歌詞であったと思います。

また昭和十三（一九三八）年の夏のころには、
鮮ソ国境で張鼓峰事変が発生し、正直、勇猛の相
言葉のもと国境守備のニュースや、さらに翌昭和
十四年には、ノモンハン事変が起り、日本を取り
巻く国際情勢の緊張が我が身に迫りつつあること
を感じられてきました。これらは、いやが上にも
青年期の自分自身に精神昂揚を促し、青年学校で
の軍事教練に一層励み、特に銃剣術に力が入りま
した。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争の幕が切つ
て落とされました。産業、増産を叫ばれる国策に

呼応して食糧増産に邁進しました。昭和十六年の
徴兵検査では甲種合格を申し渡され、昭和十七年
四月、山川村の五人の同級生と共に、村中の老若
男女の皆様の見送りを受け、久留米西部第四十八
部隊、第三重機関銃隊江口隊に入隊、第三班に編
入されました。そして宮崎班長指揮のもと、峻烈
極まる初年兵教育に邁進、逞しい兵士に変貌しま
した。この間頑張ったものと思います。

第一期の検閲終了後、私は三十数人のうち三人
の上等兵進級の中に入りました。そして私は教育
係に選ばれました。その初年兵教育に当っては班
長、教官との夜遅くまでの打ち合わせ、歩兵操典
の繰り返し暗記や、礼式令、典範令の目通しなど
夜遅くまで努力を続けました。

初年兵教育の次には幹部候補生の教育を担当し、
引き続き召集兵の教育係として、激動期に耐えう
る兵士に育て上げて来ました。この間、私は村の
中でも力持ちであり、軍隊でも重機を一人で担ぎ
歩行して見せたりしていました。また体重は六十

キ口を越えており、銃剣術の対抗戦では機関銃隊に勝利をもたらせていました。

教育終了の兵士は次々と龍部隊や菊部隊に送られ、南方戦線で散華したことは終生忘れ得ぬ出来事であります。

戦局は次第に逆転を余儀なくされ、軍事力の再編成が急がれるようになりました。そして積部隊の編成が完結し、鹿児島県志布志町田床地区の公民館や民家等に駐屯して、桂ヶ丘に出動して陣地の構築に当り、ここでは第五班長として指揮を執りました。これは防空壕掘り、横穴掘りなどの陣地の構築で休む余暇はありませんでした。

絶えず米機の空襲に見舞われ、日増しにその回数はいくつたり、炊事の煙が立てばそれを目当てに機銃の掃射を浴びせて、四、五人で歩いていると、すぐ打ち込まれ、少しの油断も出来ない有様でした。またこのほか困ったのは食料の不足でした。

民家の畑の掘り残した芋を拾い集めて、飯盒で炒めて食べるなど苦勞の連続でした。

そのような激しい空襲の中、宮崎県北諸方郡中霧島に移駐、その警備に就きました。ここでも陣地構築に専念したのですが、物資や食糧などが全く欠乏している中でしたので、苦慮しつつ軍務に奮闘しておりました。そして八月十五日終戦を知らされました。

振り返って見ますと、十七年の九月ごろ、多くの戦友が満州国牡丹江省城子溝に出動しました。この時、私はただ一人、教育係として原隊に残留しました。この出動した戦友の多くは満州から南方戦線に進出し、とくに硫黄島の守備に当りました。

そこでは名将とうたわれた栗林忠通中将の指揮下で良く戦い、迫り来る米兵を叩き、全員玉碎となり護国の鬼となりました。彼らは名将のもと、米軍の言う五日間で占領するとの公言を一カ月半も遅らせ、その上日本軍を上回る二万八千人の損害を与えた功績は誠に偉大な戦史として残るものであります。

話は違いますが、鹿児島湾に集結した船団が外洋に出ようとしても、付近には敵の潜水艦が集結していて、出るに連れぬ状態でありました。

幹部候補生の教育には親身になって世話をし送り出しましたが、彼らが見習士官となって立派な士官の姿で何人かが訪ねて来ますと、私より先に敬礼して「その節はお世話様に相成りました」と礼を言われた時は、思わず落涙致しました。

また敵機の機銃掃射も低空で来れば当方も重機で迎え撃つこともできるのですが、そうすれば、そこへ打ち込んで来る始末です。大型のB 29は高々度飛行ですから日本軍の高射砲では届かず、高射砲陣地も鳴りをひそめておりました。

昭和二十一年七月、復員しましたが、伍長のままでした。私の長兄はラバウルに勤務しておりました。そして日本軍の中にあつて住民や島民には日ごろより何かと心くばりを重ねて、現地人からは大変に慕われていたのですが体調を崩して歩行も困難の状態でした。衰弱もひどくなり最後の

復員船に乗り込むことも出来ない状態の時に、四、五人の島民が、何としても恩人を船に運ぼうと、協力して船に押し上げてくれたそうで、このお陰で何とか命からがら帰郷することができたとのことでした。

次兄は船乗りで「靖国丸」の船員として欧州航路に就いておりましたが、戦後、船は連合軍に接収されて船籍を離れました。そして兵籍は無く帰国後養鶏業を営んでおりました。今は他界しております。

私は昭和二十二年に森家の養子となりました。森家の母も慈愛に満ちた人で、妻と共に、奮闘努力の見本のごとく働き、現在までにトマト作りは五十年の経験者となり、その栽培面積は一千坪、それにスモモは六百坪の栽培をして参りました。スモモは山梨県産に劣らず神戸、東京、横浜等の市場で高い評価を受けております。今は後継者に任せてゆくようにしています。子供は男子二人に恵まれました。長男は農業者に、次男はインテリ

ア業に就きました。私は若いころより土地改良区の総代を勤めたり、民生委員も三期十二年間を務め、青少年指導員は九年間行いました。

農業に関しては、各都道府県のJAとの交流も多く、その都度出掛けて互いの研鑽を高めております。

また余暇を見て、今は亡き数々の戦友の墓参を心掛けておりますが、このことは内地勤務に終始し、戦線に行かなかった私の努めとして、終生、心してゆこうと思っております。